東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

聴覚障害幼児における音韻意識形成の発達的特徴：音情報と文字情報の優位性の違いから

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): Hearing impaired children, phonological awareness, syllabic segmentation, fingerspelling, kana words 作成者: 渡部, 杏菜, 濵田, 豊彦, 櫛山, 櫻, 大鹿, 綾 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173392

聴覚障害幼児における音韻意識形成の発達的特徴
── 音情報と文字情報の優位性の違いから ──

渡部　杏菜*・濵田　豊彦**・櫛山　櫻***・大鹿　綾****

読み書きの発達において，音韻意識の習得は不可欠である。聴覚障害児は本来1拍として認識される拗音を2拍（例：[き][ゅ][う][り]）と認識する反応が見られ，文字のイメージを活用して音韻意識を形成する者がいる。本研究は実態に応じて音韻意識の形成を促し，読み書きを指導していくために，音のイメージによって音韻意識を形成するのか，文字のイメージも活用して音韻意識を形成するのかで聴覚障害児を分類し，それぞれの音韻意識の発達と単語の読みならびに書きの発達の特徴を明らかにすることを目的とした。

2歳7ヶ月～5歳10ヶ月の聴覚障害児35名に音韻分解課題，指文字理解・表出課題，かな単語理解・書字課題を定期的に実施し，約2年間の発達を追った。音韻分解課題の反応から，音のイメージによって音韻意識を形成する群，文字のイメージも活用して音韻意識を形成する群がみられ，各群で音韻意識の発達と文字の認識および習得に特徴がみられた。

音のイメージによって音韻意識を形成する者は，音韻分解が先行して発達し，追うようにして指文字表出，かな単語書字も発達していく傾向が示された。しかし，5歳代ではまだ単語の読み書きの習得が十分ではなく，その後の文字や単語の習得によって音韻意識の内面化が促され，安定した音韻意識が形成されることが推察された。文字のイメージも活用して音韻意識を形成する群は，文字への認識が早かった。また，5歳代で拗音の2拍化と，指文字表出能力，かな単語書字能力の伸びがみられ，指文字やかな文字の習得によって，聴覚障害児特有の音韻意識を確立していることが考えられた。

Key words

聴覚障害児，音韻意識，音韻分解，指文字，かな単語

*神奈川県立平塚ろう学校／東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科発達支援講座
**東京学芸大学特別支援科学講座
***東京学芸大学生活科学講座／明治薬科大学薬物治療学研究室
****筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター